厚真町

鯉沼２遺跡

―勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 30 年度

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

口絵 1

TP-1(手前)・TP-2

口絵 2

包含層出土の遺物

基本土層

例　言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が行う厚幌導水路工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成30（2018）年度に発掘調査を実施した、厚真町鯉沼2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、第2調査部第3調査課が担当した。
3. 整理作業は、村田　大が担当した。
4. 現場および遺物の写真撮影は、村田が行った。
5. 石器などの石材鑑定は、過年度の調査出土遺物などを参照して村田が行った。
6. 本書の執筆および編集は、村田が担当した。
7. 調査にあたっては、下記の諸機関、各氏からご指導、ご協力をいただいた（順不同・敬称略、所属は発掘調査時）。

北海道教育委員会
厚真町教育委員会　乾　哲也、奈良智法
平取町教育委員会　森岡健治
様似町教育委員会　髙橋美鈴

記号等の説明

1. 遺構は、本文中および図、表中では以下の記号を用い、原則として確認順に番号を付した。
   TP：Tピット
2. 遺構図には、方位記号を付した。発掘区の基線（北－南、数字を付したライン）は真北である。レベルは標高（単位m）を示す。
3. 遺構平面図の小数字は、標高（単位m）を表している。
4. 遺構の規模は、「確認面の長軸長×短軸長／坑底面の長軸長×短軸長／確認面からの最大深」を単位mで示してある。
5. 掲載した遺構図等の縮尺は、原則として以下のとおりである。これ以外の縮尺を用いる場合にはスケールを付した。
   遺構実測図　1：40　　土器拓影図　1：2　　剥片石器実測図　1：2
6. 石器の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。なお、破損しているものについては、現存長を（　）で示した。
7. 基本土層はローマ数字、それ以外の土層はアラビア数字を用いて表した。
8. 火山灰について以下の略号を用いている部分がある。これらは、過去の調査結果などを参考にして、現地の層位的な検出状況と外見から判断しており、分析による同定は行なっていない。
   Ta－b：樽前bテフラ（1667年降灰）
   B－Tm：白頭山－苫小牧火山灰（10世紀）
   Ta－c：樽前cテフラ
   Ta－d：樽前dテフラ
   Spfa－1：支笏第1テフラ
9. 土層の混合状態などを表現するために、以下のように表記した。
   A+B：AとBが同量混じる。　　A≒B：AとBの土層が類似する。
   A>B：AにBが少量混じる。　　A≫B：AにBが微量混じる。
10. 土層の色調には『新版標準土色帖』30版（小山・竹原2008）を使用し、カラーチャートの番号を付した。

目　次

口絵
例言
記号等の説明
目次
挿図目次
表目次
図版目次

Ⅰ章　緒　言
1　調査要項 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査に至る経緯と経過 …… 1
(1) 調査に至る経緯
(2) 調査の経過
4　調査の方法 …… 4
(1) 発掘区の設定
(2) 発掘調査の方法
(3) 基本土層
(4) 整理作業の方法
(5) 遺物の分類
5　調査結果の概要 …… 8

Ⅱ章　遺跡の立地と環境
1　厚真町の位置 …… 9
2　遺跡周辺の地形と環境 …… 9
3　周辺の遺跡 …… 9

Ⅲ章　遺構と出土遺物
1　概要 …… 13
2　Tピット …… 13
3　包含層出土の遺物 …… 13

Ⅳ章　総　括
1　過年度調査と遺跡周辺の旧地形について …… 19
2　平成30年北海道胆振東部地震後の遺跡周辺地形について …… 21

引用・参考文献 …… 30
写真図版 …… 31
報告書抄録

挿図目次

〔緒言〕
図Ⅰ－1　遺跡の位置 …… 2
図Ⅰ－2　厚幌導水路計画路線と遺跡の位置 …… 3
図Ⅰ－3　発掘区設定図 …… 5
図Ⅰ－4　土層断面図と柱状図 …… 7

〔遺跡の立地と環境〕
図Ⅱ－1　遺跡周辺の地形（1） …… 10
図Ⅱ－2　遺跡周辺の地形（2） …… 11
図Ⅱ－3　遺跡周辺の地形（3） …… 11
図Ⅱ－4　周辺の遺跡 …… 12

〔遺構と出土遺物〕
図Ⅲ－1　遺構位置図 …… 14
図Ⅲ－2　TP－1、TP－2 …… 15
図Ⅲ－3　遺物分布図 …… 16
図Ⅲ－4　包含層出土の遺物 …… 17

〔総括〕
図Ⅳ－1　遺跡周辺の旧地形 …… 20
図Ⅳ－2　厚真町遺跡分布図 …… 22
図Ⅳ－3　遺跡の位置と斜面崩壊・堆積分布図 …… 23
図Ⅳ－4　地質図と斜面崩壊・堆積分布図 …… 24
図Ⅳ－5　厚幌導水路関連遺跡と撮影範囲 …… 25
図版Ⅳ－1 …… 26
図版Ⅳ－2 …… 27
図版Ⅳ－3 …… 28
図版Ⅳ－4 …… 29

表目次

〔緒言〕
表Ⅰ－1　遺構一覧 …… 8
表Ⅰ－2　出土遺物一覧 …… 8

〔遺跡の立地と環境〕
表Ⅱ－1　周辺の遺跡一覧 …… 12

〔遺構と出土遺物〕

表Ⅲ－1　遺構規模一覧 …… 18
表Ⅲ－2　出土遺物集計 …… 18
表Ⅲ－3　掲載土器一覧 …… 18
表Ⅲ－4　掲載石器一覧 …… 18

図版目次

図版1　表土除去作業
1　調査前現況（西から）
2　東側調査区（南から）
3　西側調査区（南西から）
4　遺構確認調査区（南から）
5　調査区全景（東から）
図版2　土層
1　土層1（南西から）
2　土層2（南西から）
3　土層3（北西から）
4　土層4（北西から）
5　土層5（北西から）
6　土層6（北西から）
7　土層7（北から）
8　土層9（北西から）
図版3　遺構確認調査区調査状況
1　調査状況（南西から）
2　完掘（西から）
図版4　東側調査区調査状況（1）
1　調査状況（西から）
2　調査状況（北西から）
3　調査状況（北東から）
4　石鏃出土状況
5　調査状況（北から）
図版5　東側調査区調査状況（2）
1　遺構確認調査
2　完掘（西から）
3　完掘（北西から）
図版6　TP－1（西側調査区）
1　検出（北東から）
2　検出（南から）

3　調査状況（北から）
4　断面（南から）
5　完掘（南から）
6　調査状況（南東から）
図版7　TP－2（西側調査区）
1　調査状況（北西から）
2　検出（北西から）
3　断面（北西から）
4　調査状況（北東から）
5　完掘（北から）
図版8　西側調査区調査状況
1　調査状況（北東から）
2　調査状況（北西から）
3　石鏃出土状況
4　調査状況（北から）
5　完掘（北東から）
図版9　包含層出土の遺物
1　包含層出土の遺物（図Ⅲ－4）

Ⅰ章　緒　言

1　調査要項

事　業　名	勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
事業受託者	公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター
遺　跡　名	鯉沼2遺跡（北海道教育委員会登載番号　J－13－68）
所　在　地	勇払郡厚真町字鯉沼160－1、160－3、161－1
調査面積	1,971㎡
現地調査期間	平成30年6月5日～7月12日
整理期間	平成30年7月17日～平成31年3月29日

2　調査体制

理事長	越田　賢一郎
副理事長	中田　仁
専務理事	山田　寿雄（事務局長兼務）
常務理事	長沼　孝（第1調査部長兼務）
第2調査部長	鈴木　信
第3調査課課長	村田　大（発掘担当者）
主　査	立田　理（発掘担当者）

3　調査に至る経緯と経過

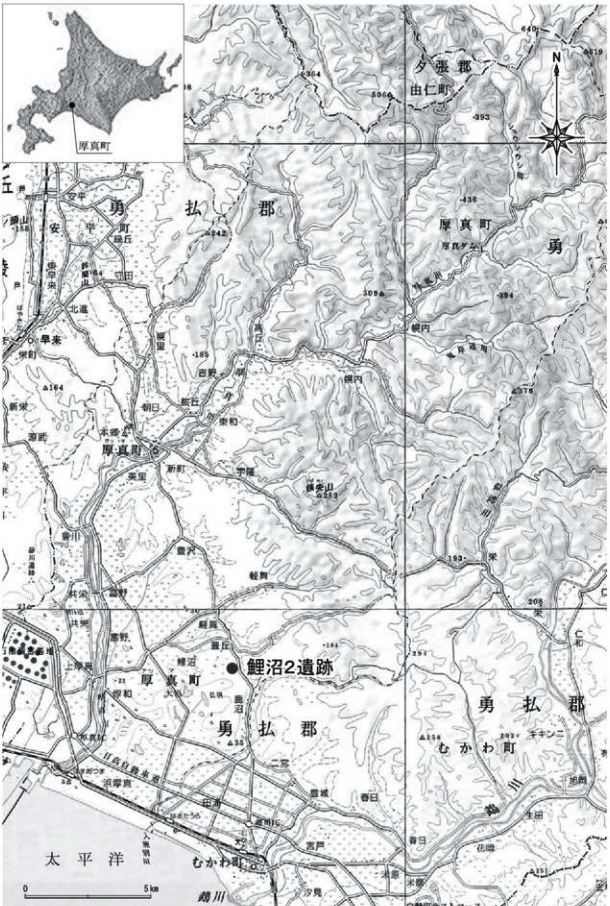
(1) 調査に至る経緯

厚幌導水路事業は、安定的かつ効率的な農業用水の供給を目的として、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部（以下、室蘭開建）が実施中の農業農村整備事業で、国営勇払東部（二期）土地改良事業の一つである。事業は、現在、北海道胆振総合振興局が推進中の厚幌ダム建設事業と連動し、厚幌ダムができる厚真町幌内地区から町南部の鹿沼地区までの総延長24.5㎞に、地下埋設導水管を敷設するもので、平成7年に北海道と厚真町の間で締結された「厚真川総合開発事業厚幌ダム建設工事に関する基本協定」に含まれている。

厚幌導水路建設事業が具体化されるに伴い、平成15年10月に室蘭開建より北海道教育委員会（以下、道教委）へ埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。事業者からの早急な所在確認調査の実施要求を受けて、対象範囲について、平成15年11月に厚真町教育委員会（以下、町教委）が所在確認調査を実施し、結果を道教委へ報告した。この報告を受けて道教委は、平成15年12月、4か所で試掘調査が必要と事業者に回答した。試掘調査は平成16年10月と平成17年4月に実施され、ニタップナイ遺跡、幌内5遺跡、幌内6遺跡、幌内7遺跡について発掘調査が必要と回答がなされた。

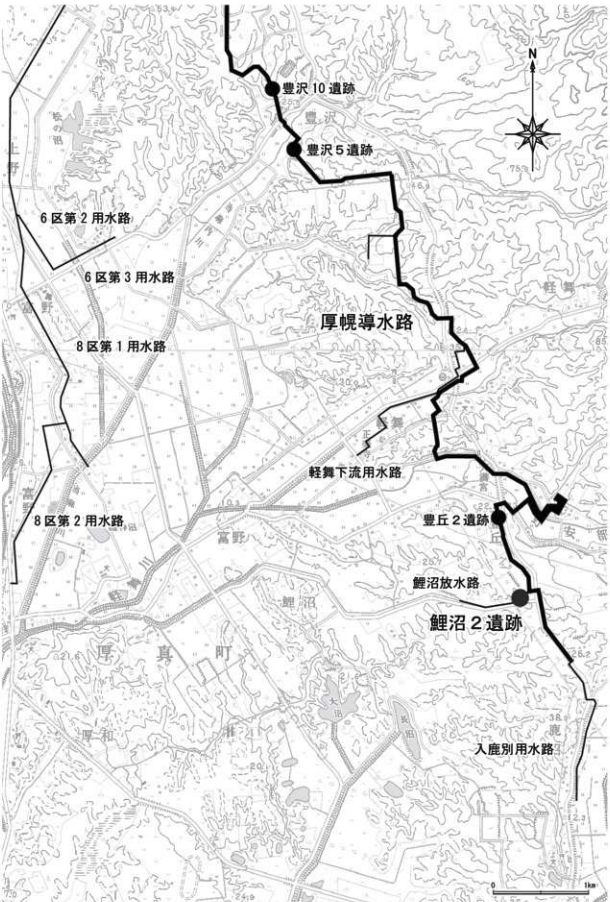
これ以後、道教委は、導水路の本線および支線用水路などの施工路線が確定次第、順次、所在確認調査および試掘調査を実施している。発掘調査または遺構確認調査が必要とされた遺跡は、平成30年5月現在、19遺跡で面積の合計は約22,000㎡である。

発掘調査は、平成19年度から町教委によって行われ、現在まで、ニタップナイ遺跡（厚真町2009、2010b）、厚幌1遺跡（厚真町2010a）、幌内7遺跡（厚真町2010a）、幌内5遺跡（厚真町2010b）、富



国土地理院発行20万分の1地勢図「夕張岳」「浦河」「札幌」「苫小牧」に加筆

図Ⅰ－1　遺跡の位置



国土地理院発行数値地図25000「札幌」に加筆

図Ⅰ－2　厚幌導水路計画路線と遺跡の位置

里2遺跡（厚真町2010b）の5遺跡で調査が行われ調査報告書が刊行されている。

また、厚幌導水路建設事業が本格化するに伴い、平成25年度から公益財団法人北海道埋蔵文化財センター（以下、道埋文センター）も発掘調査を行うこととなった。これまでに、道埋文センターが調査を実施した遺跡は、厚幌1遺跡（平成25・27年調査）、厚幌2遺跡（平成27・28・29年調査）、オコッコ1遺跡、幌内6遺跡、富里3遺跡（ともに平成27年調査）、幌内7遺跡（平成27・28年調査）、豊沢5遺跡、富里1遺跡（ともに平成28年調査）、豊沢10遺跡、豊丘2遺跡（ともに平成29年調査）、鯉沼2遺跡（平成30年調査）の11遺跡である。このうち、富里3遺跡、厚幌1遺跡、幌内6遺跡、幌内7遺跡、豊沢5遺跡、富里1遺跡、豊沢10遺跡、豊丘2遺跡の報告書は刊行済みである（北埋調報326集・336集・341集）。今回は、鯉沼2遺跡について報告する。

(2) 調査の経過

鯉沼2遺跡の調査範囲は、厚幌導水路の支線のうち「鯉沼放水路」にあたる。道教委が平成29年11月20・21日に、放水路線上の東西約150m、面積2,400㎡に7か所のテストピット（1.5m×2.5m）を設定し試掘調査を実施した。そのうち1か所からTピットが検出された。Ⅴ層の黒色土は、試掘範囲の東西端に残存し、中央部分は支笏第1テフラ層まで削平が及んでいた。遺構の検出により、Ⅴ層の黒色土が残存する範囲は通常の発掘調査範囲とし、中央付近の黒色土が削平された範囲は、Tピットが検出される可能性があることから、遺構確認調査範囲として発掘調査が必要と報告された。

その後、工事範囲などを精査した結果、調査範囲は、東側の黒色土残存範囲631㎡、西側の黒色土残存範囲404㎡、中央の遺構確認範囲936㎡の合計1,971㎡となり、工事工程の都合などから、調査は平成30年度に実施し、当該年度内に報告書を刊行することとなった。

調査前の現況は畑地であった。調査は、平成30年5月22日から、耕作土の除去や調査杭の打設などの準備工を開始し、6月5日から着手した。調査範囲の一部は、耕作土下の整地盛土や火山灰が想定よりかなり厚く堆積しており、安全確保のため法面を付けて掘り下げた。現地調査は7月12日に終了した。

4　調査の方法

(1) 発掘区の設定

現地調査の基本図は、北海道開発局室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所作成「鯉沼放水路仮設計画図　1,000分の1」を使用した（図Ⅰ－3）。

発掘区の基線は、世界測地系（平面直角座標ⅩⅡ系）を使用した。X座標=－150,190とY座標=－27,150の交点を起点A・0とし、南にB、C、D・・・、西に1、2、3・・・と5m幅の平行する線を設定した。北東側の杭を個々の発掘区の呼称とし、アルファベットとアラビア数字の組み合わせによった。

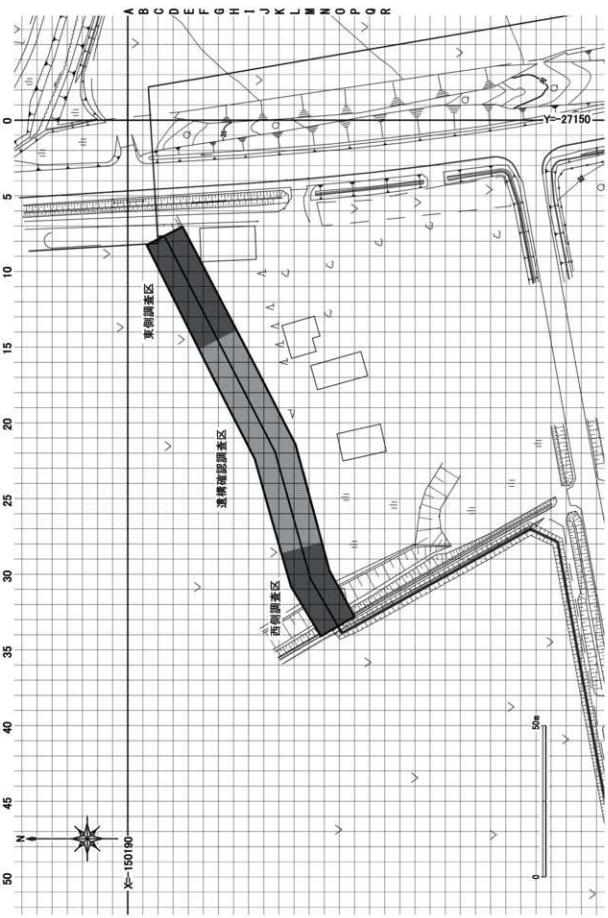
水準測量は発掘区付近に所在する、北海道開発局室蘭開発建設部設置の「仮BM　№1」を用いて各測量に使用した。

平成28（2016）年11月設置　「仮BM　№1」　H=31.864m

(2) 発掘調査の方法

調査区は3つに区分されている。東西に長い調査範囲内の両端に通常発掘調査区があり、中央に遺構確認調査区がある。調査の際は、便宜的に東側調査区、遺構確認調査区、西側調査区と呼称して作業にあたった。

調査範囲は、工事終了後に原状回復し、再び畑地として利用されるため、準備工時と調査時の排


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
Y=-27150
X=-150190
N
東側調査区
遺構確認調査区
西側調査区
0
5
10
15
20
25
30
35
40
45
50
0
50m

図Ⅰ－3 発掘区設定図

土は、耕作土、火山灰、黒色土に分け、すべて調査範囲外へ搬出した。調査前の準備工作業では、調査範囲がすべて畑地のため最初に重機で耕作土を除去した。その後、通常発掘調査区は整地盛土層からTa－b火山灰層（Ⅱ層）までを重機により除去した。上位の黒色土層（Ⅲ層）は調査対象外であったがこの段階で、遺物や遺構の有無を確認した。遺物が出土しなかったので、Ⅲ層およびTa－c火山灰層（Ⅳ層）を重機で除去した。Ⅴ層上面の検出は人力でジョレンやスコップを使用して行った。Ⅴ層の遺物包含層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてジョレン、移植ごて、竹ベラなどを用いて人力による手掘り作業により掘り下げた。

遺構確認調査区の遺構検出作業は、移植ごて、ジョレン等を使って人力で行った。遺構は検出されなかった。

包含層出土の遺物は、すべて位置を計測し取上げた。出土状況に応じて、写真や出土状況図の作成などで記録した。

現地調査での撮影機材は、Nikon　D5600、SONY　TX−30を状況に応じて使用した。

(3) 基本土層

層名は、これまでの厚真町教育委員会の調査に準じている。Ⅷ層の樽前dテフラは、橙色の粒子がⅥ層やⅨ層で部分的にみられる程度のため、土層図では標記していない。調査区境の壁面10か所で土層断面図または土層柱状図を作成した（図Ⅰ－4）。

Ⅰ層：表土、耕作土、畑地造成の盛土（Ta－bが大半）などを一括した層。
Ⅱ層：Ta－b　樽前bテフラ　1667年降下　暗灰黄色（2.5YR5/2）層厚50 ～ 70cm
Ⅲ層：黒色土（10YR2/1）粘性あり。粒子細かい。
　B－Tm：白頭山－苫小牧火山灰　10世紀前半降下　にぶい黄褐色土（10YR6/4）Ⅲ層上部に部分的に堆積する。
Ⅳ層：Ta－c　樽前cテフラ　約2,500年前降下　黒褐色土（10YR2/3）層厚約5cm。堆積がほとんどない部分があり、Ⅲ層とⅣ層の境が不明瞭な部分がある。
Ⅴ層：黒褐色土（10YR2/2）縄文時代の遺物包含層
Ⅵ層：暗褐色土（10YR3/4）漸移層。Ⅷ層の粒子が少量混じる　層厚20 ～ 25cm。
Ⅶ層：Ta－d　樽前dテフラ主体の再堆積層　本遺跡では未確認。
Ⅷ層：Ta－d　樽前dテフラ　約8,000年前降下　部分的に橙色粒子が散見される程度である。
Ⅸ層：Spfa－1　支笏第1テフラ　約3万1千年前から3万4千年前降下　灰白色（10YR8/2）遺構確認区の中央付近では、これより下位の層の可能性があるがここでは一括して扱う。

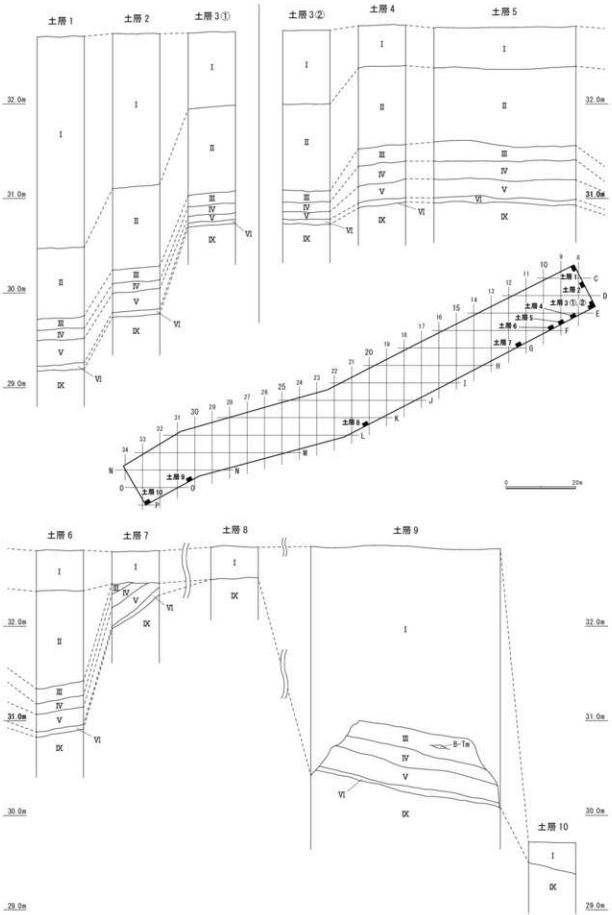
(4) 整理作業の方法

一次整理

現地で、水洗・分類・遺物注記・遺物台帳作成など行った。

遺物の注記は、以下のように行った。遺構から遺物は出土しなかったため、包含層出土の遺物に「遺跡名」・「発掘区」・「層位」・「遺物番号」を記入した。

記載例　ニ2（遺跡名）・F11（発掘区）・Ⅴ（層位）・1（遺物番号）



図Ⅰ－4　土層断面図と柱状図

二次整理

江別市の道埋文センター整理作業棟で行った。土器は、接合・復元作業を行い、実測、拓本、図版作成、一覧表作成、写真撮影を行った。石器は、報告書掲載用石器の選び出しを行い、実測、トレース、図版作成、一覧表作成、写真撮影を行った。遺構図面の作成、表作成、原稿執筆を行い、報告書編集作業を行った。

整理作業後の遺物は「報告書掲載遺物」と「非掲載遺物」に区分してコンテナに収納し、「遺物収納台帳」に記載した。報告書刊行後、北海道教育委員会の指示により厚真町へ移管予定である。写真・図面等の記録類は、北海道立埋蔵文化財センターで保管される。

(5) 遺物の分類

土器等

Ⅰ群　縄文時代早期の特徴がある土器群。

a類：貝殻腹縁文・条痕文・沈線文のある土器群。

b類：撚糸文・絡条体圧痕文・短縄文などが施される土器群。東釧路系土器群に相当するもの。

*1点出土している。

Ⅱ群　縄文時代前期の特徴がある土器群。

Ⅲ群　縄文時代中期の特徴がある土器群。

Ⅳ群　縄文時代後期の特徴がある土器群。

Ⅴ群　縄文時代晩期の特徴がある土器群。

Ⅵ群　続縄文時代の特徴がある土器群。

Ⅶ群　擦文文化期の特徴がある土器群。

石器等

分類に使用している器種の名称、および掲載順は以下のとおりである。

剥片石器群：石鏃（長軸4cm未満）、剥片

5　調査結果の概要

検出した遺構は、Tピット2基である。いずれも西側調査区で検出した。1基は、試掘調査時に検出されていたものである。

出土した遺物は、土器では縄文時代早期後半のものが1点、無文の胴部破片が1点の計2点、石器は石鏃が8点と剥片2点で、東側調査区での出土が多い。

（村田　大）

表Ⅰ－1　遺構一覧

種　別	数	備　　考
Tピット(T)	2	西側調査区で検出

表Ⅰ－2　出土遺物一覧

	土器等	石器等	計
遺構	0	0	0
包含層	2	10	12
計	2	10	12

Ⅱ章　遺跡の立地と環境

1　厚真町の位置

鯉沼2遺跡のある厚真町は、太平洋に面する勇払平野の東端に位置し、胆振総合振興局管内勇払郡に所在する（図Ⅰ－1）。町域は、大きく厚真川沿いとむかわ町と接する入鹿別川流域の鹿沼地区に分かれる。厚真川沿いは、海岸と広大な水田地帯のある下流域の浜厚真、上厚真地区、中流域は厚真町の市街地を形成し、中流域から上流域にかけては幌内地区となっている。北部の山林地帯と南部の平野で構成され、町域のほぼ中央を厚真川が貫流する。厚真川は流路長約52㎞で、夕張山地南部を水源とし太平洋へ注ぐ二級河川で流域には水田地帯が広がる。

北側は、夕張山地から続く山地で、太平洋と日本海の分水界として夕張市・由仁町と接し、東側はむかわ町、西側は、山地性丘陵を挟み安平町と、勇払平野で苫小牧市と接し、南側は砂浜が続き太平洋に臨んでいる。

町名になっている「厚真」は、アイヌ語の「アットマム」（向こうの湿地帯）が転訛したもので、厚真川の河口付近の地名であると言われている（『厚真村史』厚真村　1956）。

遺跡名の「鯉沼」は、以前の字名が「上周文」であった。「周文」の読み方は資料により「シブン・シブン・シュプン」などがあり、厚真村史（厚真村　1956）には「シュプン」（supun　うぐい）とある。現在、厚真町の字名に「周文」は残っていないが、苫小牧東港の周文（しゅうぶん）埠頭として名をとどめている。

2　遺跡周辺の地形と環境

遺跡は、厚真川支流の軽舞川へ注ぐ小河川、鯉沼川の源頭部付近の台地上に立地する。鯉沼川は厚真川に流入するいくつかの支流のうち、左岸では最も南に位置している。遺跡から約4㎞流下すると、沖積低地が広がり主に水田として利用されている。上厚真地区で軽舞川と合流し、上厚真大橋付近で厚真川に合流している。調査前の現況は畑地であった。遺跡付近は畑地の造成によって広範囲に平坦化されている（図Ⅱ－1　低位：青・緑色～高位：茶・紫色のレリーフ表現で作成）。調査範囲内は東西の低位部分に遺物包含層である黒色土が残存し、中央付近は広く削平が及んでいた。

遺跡の南側を「戊午　東部　安都麻志　全」『戊午　東西蝦夷山川地理取調日誌　中』（松浦、秋葉　1985）に「此村よりニワンえ山道三里半にて有と、近きよし」と記された「山道」が通っていたようである。池田・亀井はこの「山道」を「明治29年5万分の1図に記してある仁湾街道がこれにあたるのであろう。」としている（池田・亀井　1976）（図Ⅱ－3）。「仁湾街道」は、現在の地名で辿ると、厚真川の河口付近から左岸沿いを北上し、厚和地区から厚真川流域と入鹿別川流域のほぼ分水界上を北東へ向かい、大沼の北側を通り、遺跡の南付近で北に向かい野安部川へ出る。以後は、川に沿って東へ向かい、道道平取厚真線の仁湾峠付近で、仁湾川またはその支流へ出て、むかわ町穂別仁和地区に至る道筋であったと考えられる。

3　周辺の遺跡

周辺の遺跡は、軽舞川や野安部川の段丘上や小河川に開析された沢頭や湧水点付近、大沼や長沼付近に多い。縄文時代早期に相当する遺跡は少ない。

（村田）

国土地理院基盤地図情報からカシミール３Ｄで作成したものに加工、加筆

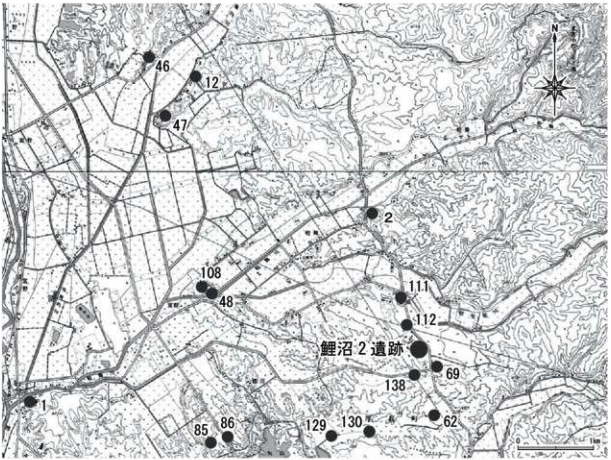
図Ⅱ－１　遺跡周辺の地形（1）

北海道開発局室蘭開発建設部胆振東部農業開発事業所作成「鯉沼放水路仮設計画図」に加工、加筆

図Ⅱ－２　遺跡周辺の地形（2）

陸地測量部５万分の１地形図「鵡川」（明治29年製版）に加筆

図Ⅱ－３　遺跡周辺の地形（3）



国土地理院発行数値地図 25000「札幌」「室蘭」に加工、加筆

図Ⅱ－４　周辺の遺跡

表Ⅱ－１　周辺の遺跡一覧

包蔵地登載番号(J-13)	遺跡名	種別	時代	立地	標高	調査年度
1	上厚真遺跡	遺物包含地	縄文中期、続縄文、擦文	厚真川と野安部川の合流点河岸段丘上	10～18m	
2	軽舞遺跡	遺物包含地	縄文中期、続縄文	丘陵	25～28m	H24(2012)町教委
12	豊沢1遺跡	遺物包含地	続縄文	丘陵	30m	
46	豊沢3遺跡	遺物包含地	擦文	丘陵裾部	15～20m	
47	豊沢3遺跡	遺物包含地	続縄文		15m	
48	鯉沼1遺跡	遺物包含地	縄文		10m	
62	鯉沼4遺跡	遺物包含地	縄文	丘陵斜面	15m	
68	**鯉沼２遺跡**	**落穴遺構**	**縄文**	**火山灰大地を開析した幾民の沢頭付近**	**30m**	**H13(2003)町教委 H30(2018)道埋文**
69	豊丘遺跡	遺物包含地	縄文前・中・後期	開析の進んだ段丘から更新世末火山灰大地への移行部、湧水点付近	32m	
85	鯉沼3遺跡	集落跡	縄文前・中・後期	北側に伸びる台地(尾根上)と樹枝状に開析する沢地形	14～18m	
86	鯉沼4遺跡	遺物包含地	縄文後期	野安部川・入厚別川右岸の沼厚別に挟まれた台地上	18m	
108	軽舞2遺跡	遺物包含地	縄文前期、続縄文	旧軽舞川に面した段丘上	9～11m	
111	豊丘2遺跡	遺物包含地	縄文早期	野安部川左岸台地(低位)	25～30m	H29(2017)道埋文
112	豊丘3遺跡	遺物包含地	縄文中期	野安部川左岸台地	約30m	
129	長沼1遺跡	遺物包含地	縄文早期	長沼東岸の微高地	20m	
130	長沼2遺跡	落穴遺構	縄文	長沼東岸の低丘陵地	20m	
138	鯉沼5遺跡	落穴遺構	縄文	無名沢・弁慶地に突出した低段丘面	15～16m	

＊遺跡番68の「北の遺跡発掘」に追加

Ⅲ章　遺構と出土遺物

1　概要

検出した遺構は、Tピット2基である。西側調査区のやや急な斜面上の沢状地形に位置しており、等高線に直交し2基並んで見つかった。

遺物は、土器は小破片のため詳細は不明だが、縄文時代早期後半のものと思われる。石器は、石鏃が大半で主に東側調査区で出土した。

2　Tピット

TP－1（図Ⅲ－2　図版6）

位置：M29・30区　標高31m付近の斜面　　**規模**：1.80×0.92 ／ 1.32×0.23 ／ 1.00m

平面形：長円形　**坑底長短比**：5.7　**長軸方位**：N－38°　E

確認・調査：平成29年11月に道教委が行った試掘調査で検出された。南東側を半裁しTピットであることを確認した。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑口部はやや広がる。底面は平坦である。

時期：不明

TP－2（図Ⅲ－2　図版7）

位置：N30区　標高30m付近の斜面　　**規模**：2.49×0.88 ／ 2.70×0.21 ／ 1.61m

平面形：長円形　**坑底長短比**：12.9　**長軸方位**：N－43°　E

確認・調査：西側調査区は、調査前の耕作土・盛土除去作業で構築物による攪乱が広く及んでいることが判明していた。土層を観察する断面が設定できる範囲が南東側の一部に限られているため、この部分の延長約2mを残して耕作土・盛土除去作業を終了し調査に着手した。

遺構は、この残した南東側調査区境付近で、黒色土の広がりとして確認した。広がりは調査区境方向へ延びていることが明らかであったが、攪乱による土層残存状況が不明のため、確認時の状況で土層断面を設定し観察した。そのため、土層断面の方向は遺構長軸に対して斜めになっている。半裁しTピットであることを確認し、図と写真で土層の状況を記録したのち、南東側のⅡ層からⅣ層を人力で除去し遺構の全体を掘り下げた。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑口部はやや広がる。底面は平坦で両端はオーバーハングしている。

時期：不明

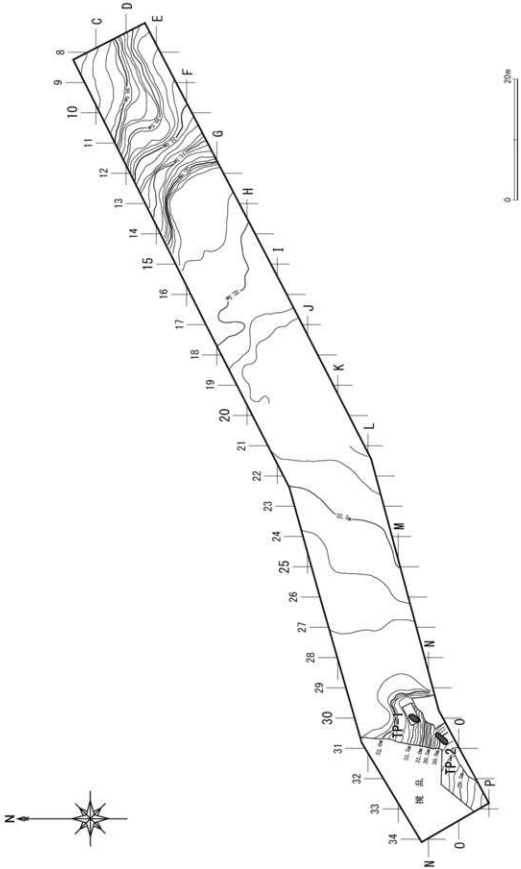
3　包含層出土の遺物

遺物出土状況

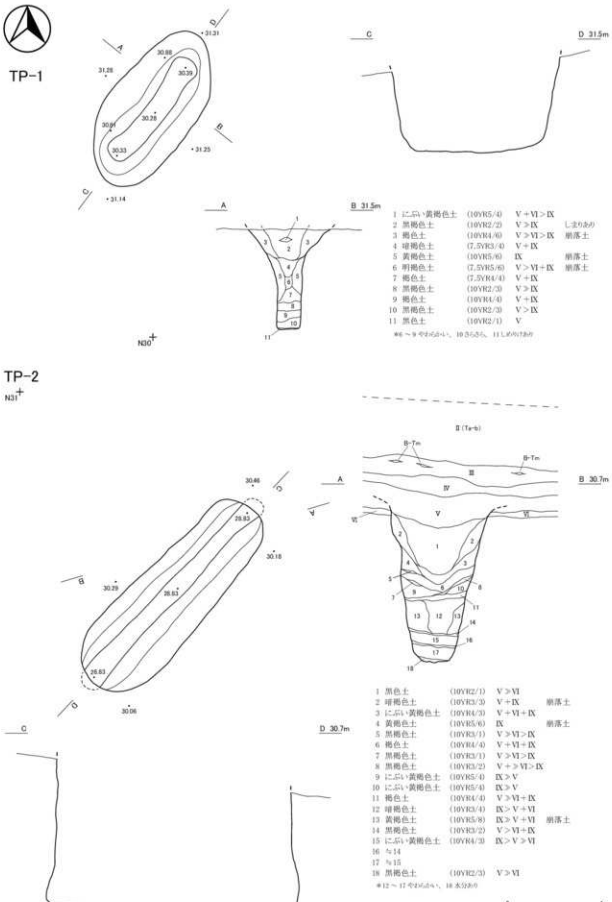
東西の調査区と中央の遺構確認調査区を合わせて、土器2点、石器10点が出土した（表Ⅲ－2）。土器は、縄文時代早期後半のものと思われる口縁部破片が1点と無文の胴部破片が1点出土した。いずれも東側調査区からの出土である。

石器は、石鏃が8点と黒曜石製の剥片が2点出土した。大半が東側調査区からの出土で、特に斜度が緩やかでやや平坦な面になるD9区とD10区付近からの出土が多い。

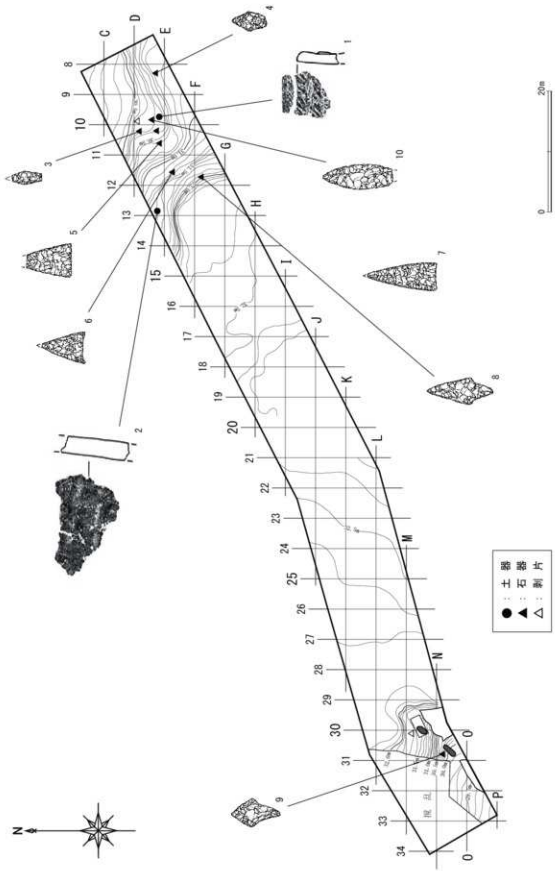
西側調査区は、攪乱が広い範囲に及んでおり、黒曜石製の石鏃と剥片がそれぞれ1点出土したのみである。


C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
TP-1
TP-2
0
20m
N

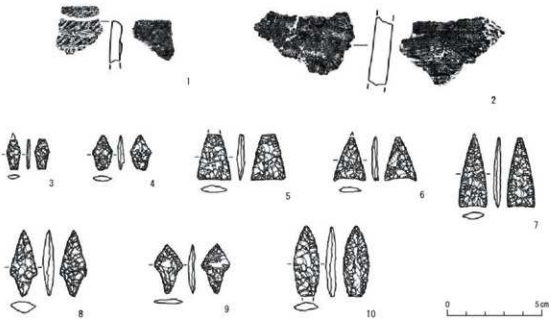
図Ⅲ－１　遺構位置図


TP-1
31.31
30.09
30.29
31.28
30.26
30.25
30.33
31.25
31.14
A
B
C
D
C
D 31.5m
A
B 31.5m
N30°
1 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) V＋VI＞IX
2 黒褐色土 (10YR2/2) V＞IX しまりあり
3 褐色土 (10YR4/6) V＞VI＞IX 崩落土
4 暗褐色土 (7.5YR3/4) V＋IX
5 黄褐色土 (10YR5/6) IX 崩落土
6 明褐色土 (7.5YR5/6) V＞VI＋IX 崩落土
7 褐色土 (7.5YR4/4) V＋IX
8 黒褐色土 (10YR2/3) V＞IX
9 褐色土 (10YR4/4) V＋IX
10 黒褐色土 (10YR2/3) V＞IX
11 黒色土 (10YR2/1) V
※6～9やせのあれ、10あらさら、11しめりけあり
TP-2
N31°
30.46
29.83
30.18
30.29
29.83
29.83
30.06
A
B
C
D
Ⅱ(Ta-a)
B-Tm
B-Tm
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅵ
B 30.7m
D 30.7m
1 黒色土 (10YR2/1) V＞VI
2 暗褐色土 (10YR3/3) V＋IX 崩落土
3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) V＋VI＋IX
4 黄褐色土 (10YR5/6) IX 崩落土
5 黒褐色土 (10YR3/1) V＞VI＞IX
6 褐色土 (10YR4/4) V＋VI＋IX
7 黒褐色土 (10YR3/1) V＞VI＞IX
8 黒褐色土 (10YR3/2) V＋＞VI＞IX
9 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) IX＞V
10 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) IX＞V
11 褐色土 (10YR4/4) V＞VI＋IX
12 暗褐色土 (10YR3/4) IX＞V＋VI
13 黄褐色土 (10YR5/8) IX＞V＋VI 崩落土
14 黒褐色土 (10YR3/2) V＞VI＋IX
15 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) IX＞V＞VI
16 ≒14
17 ≒15
18 黒褐色土 (10YR2/3) V＞VI
※12～17やせのあれ、18水分あり
0
1m

図Ⅲ－2　TP－1、TP－2



図Ⅲ－３　遺物分布図



図Ⅲ－4　包含層出土の遺物

土器（図Ⅲ－4－1・2　図版9）

1はⅠ群b類の土器片。東側調査区のやや平坦な面から出土した。短縄文による圧痕が付けられる。貼付帯があり、帯上にも施文がなされる。2は無文の胴部破片で、東側調査区の北西側から出土した。

石器（図Ⅲ－4－3～10　図版9）

石器の石材は7が頁岩製で、ほかはすべて黒曜石製である。3～10は石鏃で、3・4は五角形のもの。5～7は無茎で、5は平基、6・7は凹基である。3・6・7は先端がわずかに欠損している。6は素材剥片の主剥離面を残している。8・9は有茎で、9は鏃身が湾曲している。10は厚手の柳葉形で一部は側縁が鋸歯状である。8のみ西側調査区から出土したものである。

（村田）

表Ⅲ－１　遺構規模一覧

遺構名	図	図版	発掘区	確認面	規模(m)					平面形	時期	備考
					確認面		底面		深さ			
					長径	短径	長径	短径				
TP-1	Ⅲ－２	図版6	W29/30	Ⅸ層上面	1.80	0.92	1.32	0.23	1.00	長円形	不明	溝状タイプ　N-38° E　長短比5.7
TP-2	Ⅲ－２	図版7	N30	Ⅸ層上面	2.49	0.88	2.70	0.21	1.61	長円形	不明	溝状タイプ　N-43° E　長短比12.9

表Ⅲ－２　出土遺物集計

種別		土器			石器等			合計
遺構/包含層	層位	Ⅰ群b類	不明	計	石鏃	剥片	計	
D9	Ⅴ	1		1		1	1	2
D9	Ⅴ～Ⅵ			0	1		1	1
D10	Ⅴ			0	3		3	3
D12	Ⅴ		1	1			0	1
E8	Ⅴ			0	1		1	1
E11	Ⅴ			0	1		1	1
F11	Ⅴ			0	1		1	1
M30	Ⅴ			0		1	1	1
N30	Ⅴ			0	1		1	1
合計		1	1	2	8	2	10	12

表Ⅲ－３　掲載土器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	発掘区	層位	遺物番号	点数	分類	器種	部位	特徴	備考
Ⅲ－４	1	図版9	D9	Ⅴ	9	1	Ⅰb	不明	口縁	貼付、短縄文、口唇角	H=30.461m
	2		D12	Ⅴ	10	1	不明	不明	胴部	無文	H=31.84m

表Ⅲ－４　掲載石器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/発掘区	層位	遺物番号	遺物名	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
Ⅲ－４	3	図版9	D10	Ⅴ	5	石鏃	黒曜石	1.6	0.8	0.2	0.13	東側発掘区 H=30.422m
	4		E8	Ⅴ	3	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.45	東側発掘区 H=30.871m
	5		D10	Ⅴ	2	石鏃	黒曜石	(2.4)	1.8	0.5	1.2	東側発掘区 H=30.787m
	6		E11	Ⅴ	7	石鏃	黒曜石	(2.3)	1.7	0.4	0.81	東側発掘区 H=31.567m
	7		D10	Ⅴ	4	石鏃	頁岩	(3.7)	1.5	0.5	1.69	東側発掘区 H=30.576m
	8		F11	Ⅴ	1	石鏃	黒曜石	3.5	1.5	0.6	1.87	東側発掘区 H=32.178m
	9		N30	Ⅴ	8	石鏃	黒曜石	2.6	1.5	0.4	0.87	西側発掘区 H=30.859m
	10		D9	Ⅴ～Ⅵ	6	石鏃	黒曜石	3.7	1.4	0.6	2.24	東側発掘区 H=30.205m

Ⅳ章　総　括

1　過年度調査と遺跡周辺の旧地形について

過年度の調査

鯉沼2遺跡は、平成11年に道教委が工事立会調査し、平成13年に町教委が調査報告書を刊行している。

概要

第1次立会

工事名：鯉沼農地造成工事

立会年月日：平成11年8月10日～13日

立会面積：1,831㎡

第2次立会

工事名：土砂採取工事

立会年月日：11年9月6日～8日、10月4日～7日

立会面積：2,483㎡

検出された遺構は、Tピットが第1次立会で6基、第2次立会で7基の計13基が検出された。溝状の細長いものが大半で、平面形が小判形を呈し坑底に杭跡を持つものは1基のみである。立地は沢状地形の中または沢の落ち口付近で、流下線方向に長軸が並行するものと直交するものがある。今回の調査で検出されたものは2基とも前者に相当する。また、第2次立会時に焼土が5か所で調査され、すべて丘陵の頂部からやや下がった斜面で見つかっている。今回の調査範囲では、丘陵の頂部部分が農地または宅地の造成で削平を受けているため検出されなかったと考えられる。

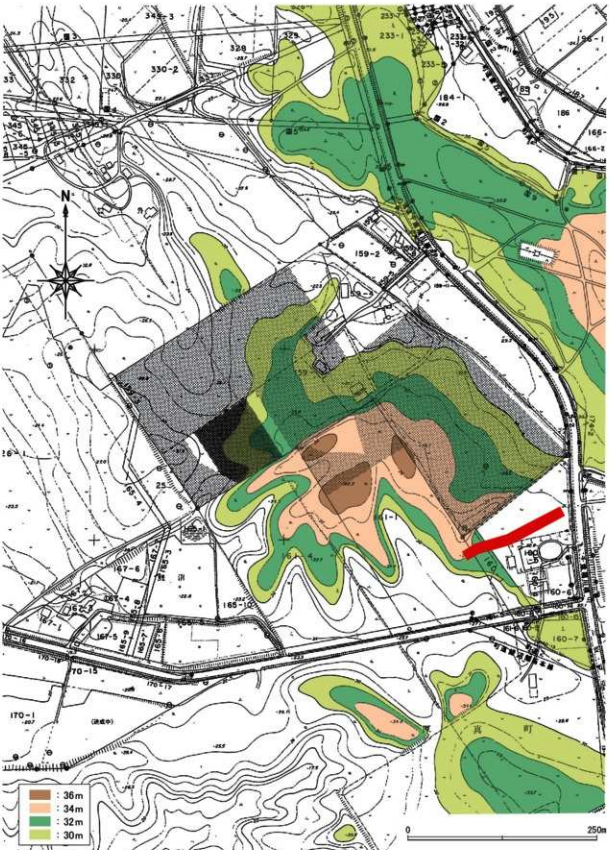
遺物は、黒曜石製と頁岩製の剥片が各1点、片岩製のたたき石が1点出土している。

遺跡周辺の旧地形

工事立会調査が行われた当時は、高規格幹線道路日高自動車道建設の盛土工事に伴って、農地の造成・改良を兼ねた土砂採取事業が活発となった時期である。図Ⅱ－1で鯉沼2遺跡付近から南側の厚和・鯉沼・鹿沼などの各地区の台地上の大半が平坦化されている様子が確認できる。

図Ⅳ－1は工事立会報告書（2001　厚真町）の「図－1　工事用地（薄網）、現状保存区域（濃網）および立会区域（白抜き）」に加筆したものである。標高30m以上の等高線で囲まれる範囲を2mおきに着色してある。平坦化される前の等高線が記載されているもので、今回の調査範囲（赤）は、平成11年の工事立会時点ですでに平坦化されている。おそらく隣接する住宅建設の際に造成されたと思われる。図中で最も高い箇所は標高36m台であるが、図Ⅱ－2の道道千歳鵡川線の東側にわずかであるが原地形が残る箇所があり、標高38mの等高線が引かれている。これらのことから、農地造成・土砂採取以前の遺跡周辺の地形は、厚真川の支流である鯉沼川の源頭部で、調査範囲に隣接する住宅付近をピークとする台地を、多くの小沢が開析した起伏に富む地形であったことがわかる。

今回の調査範囲で最も高い等高線は遺構確認調査区の32.7mである（最終遺構確認面、Ⅸ層上面）。図Ⅳ－1で今回の調査範囲付近の標高は36m程であるので、旧地表面からは4mほど農地造成などで削平され平坦化されている。



厚真町教育委員会『鯉沼２遺跡』「図１」に加工、加筆

図Ⅳ－１　遺跡周辺の旧地形

2　平成30年北海道胆振東部地震後の遺跡周辺地形について

平成30年9月6日に発生した北海道胆振東部地震によって、厚幌導水路関連遺跡周辺の地形が大きく改変された箇所があるのでその状況をみてみたい。

なお、本文中で使用した「平成30年北海道胆振東部地震に伴う斜面崩壊・堆積分布図」（以下、「斜面崩壊・堆積分布図」）および「空中写真」は国土地理院が公開しているものを使用した。

図Ⅳ－2は厚真町内の遺跡分布図である（平成29年12月1日現在）。遺跡は厚真川およびその支流沿いと南部の丘陵上に多く分布している。

図Ⅳ－3は遺跡の分布図に国土地理院の「斜面崩壊・堆積分布図」を重ねたものである。斜面崩壊の被害は震央より北側で著しいことがわかる。過去の厚真町内の調査で、厚真町市街地付近より北部では、樽前dテフラ（Ta－d）が厚く堆積し、南部はほとんど堆積していないことが確認されている。

図Ⅳ－4は地質図に「斜面崩壊・堆積分布図」を重ねたものである。北西から南東方向へ走る活断層である「厚真断層」と「平取断層」の東側で斜面崩壊が著しいことがわかる。今回の地震は「東北東－西南西方向に圧力軸を持つ逆断層型」（2018　気象庁）であった。

図Ⅳ－5は厚幌導水路計画路線と建設工事に伴い発掘調査を実施した遺跡の位置およびおおよその撮影範囲を示している。厚幌導水路の路線は、厚幌ダム堤体下から始まり厚真川左岸段丘上から厚真町市街地を抜け道道千歳鵡川線沿いをとおり入鹿別川へ至るものである。

図版Ⅳ－1－1　震災前の厚真町市街地から厚真ダム周辺の状況（厚幌ダム建設前）

図版Ⅳ－1－2　震災後の厚真町市街地から厚真ダム周辺の状況

図版Ⅳ－2－1　朝日・吉野・富里地区の状況

図版Ⅳ－2－2　富里・幌内地区の状況

図版Ⅳ－2－3　厚幌ダム・厚真ダム周辺の状況

斜面崩壊した土砂がダム湖に流れ込んでいる様子がわかる。

図版Ⅳ－3－1　富里地区の状況

図版Ⅳ－3－2　富里1遺跡（平成28年度調査、北埋調報341集）付近の状況

遺跡が立地する河岸段丘の背後にあるコムニヌプリ（標高164m）の南側斜面がほぼ崩壊している。流出した土砂は、当センターの実施した発掘調査範囲の西端付近に及んでいる。

図版Ⅳ－3－3　富里2遺跡（平成21年度町教委調査）、富里3遺跡（平成27年度調査、北埋調報326集）、ニタップナイ遺跡（平成20年度町教委調査）付近の状況

3遺跡とも厚真川左岸の平坦な河岸段丘上に立地するため崩落などは見られない。

図版Ⅳ－4－1　幌内5遺跡（平成21年度町教委調査）、幌内6遺跡（平成27年度調査、北埋調報336集）、幌内7遺跡（平成20年度町教委調査、平成27・28年度調査、北埋調報336集）、オコッコ1遺跡（平成27年度調査、北埋調報356集　＊平成28年度に厚真川河川改修工事に伴い調査、北埋調報338集）付近の状況

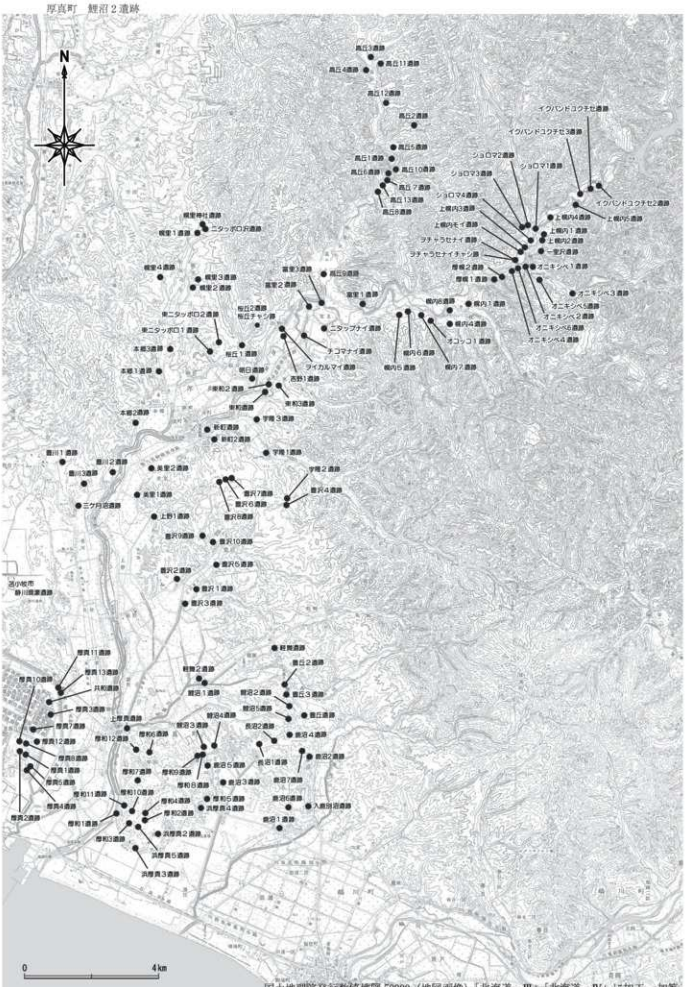
4遺跡とも厚真川左岸の平坦な河岸段丘上に立地するため崩落などは見られない。

図版Ⅳ－4－2　厚幌1遺跡（平成14・15・20・24年度町教委調査、平成25・27年度調査、北埋調報336集）、厚幌2遺跡（平成27・28・29年度調査、北埋調報357集）付近の状況。

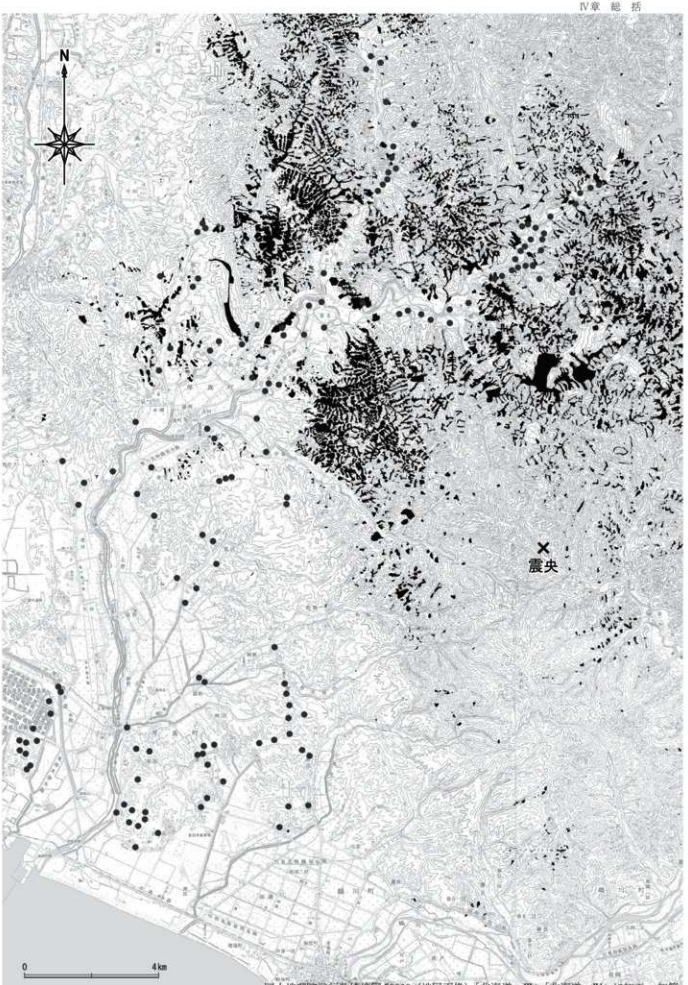
厚幌1遺跡は町教委の調査で、縄文時代中期の地震による斜面崩壊堆積物が確認されている（2004　町教委）。今回の地震でほぼ同じ位置で斜面崩壊が起こっていることが確認できる。

図版Ⅳ－4－3　朝日遺跡（＊平成24年度に道道整備関連で調査、北埋調報313集）付近の状況

遺跡の大半が斜面崩壊し、流出した土砂は厚真川の堤防まで達している。　（村田）

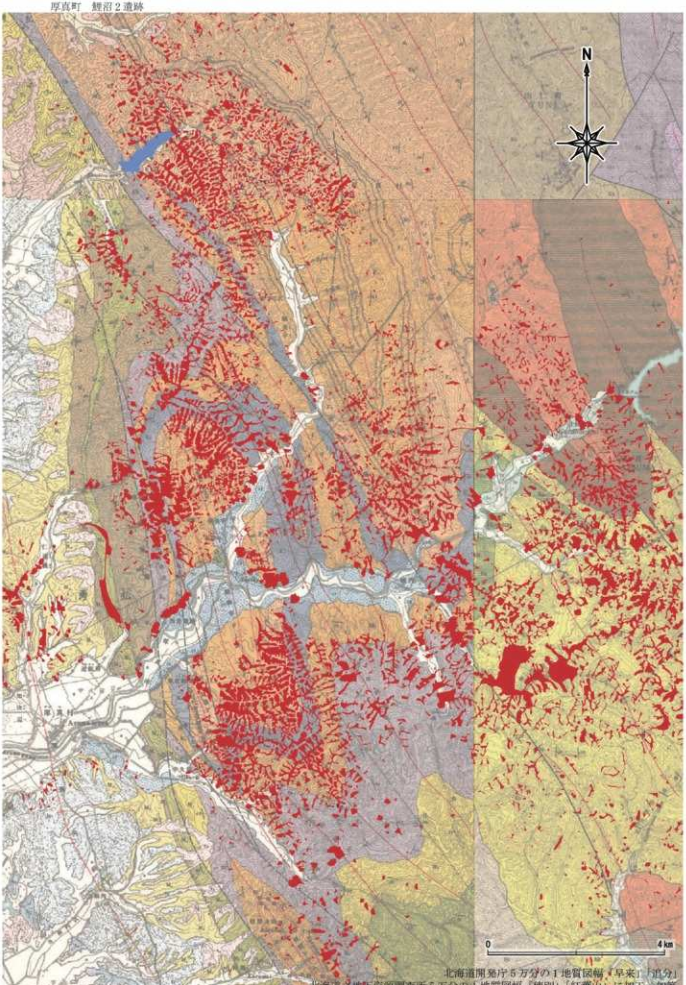


図Ⅳ－２　厚真町遺跡分布図

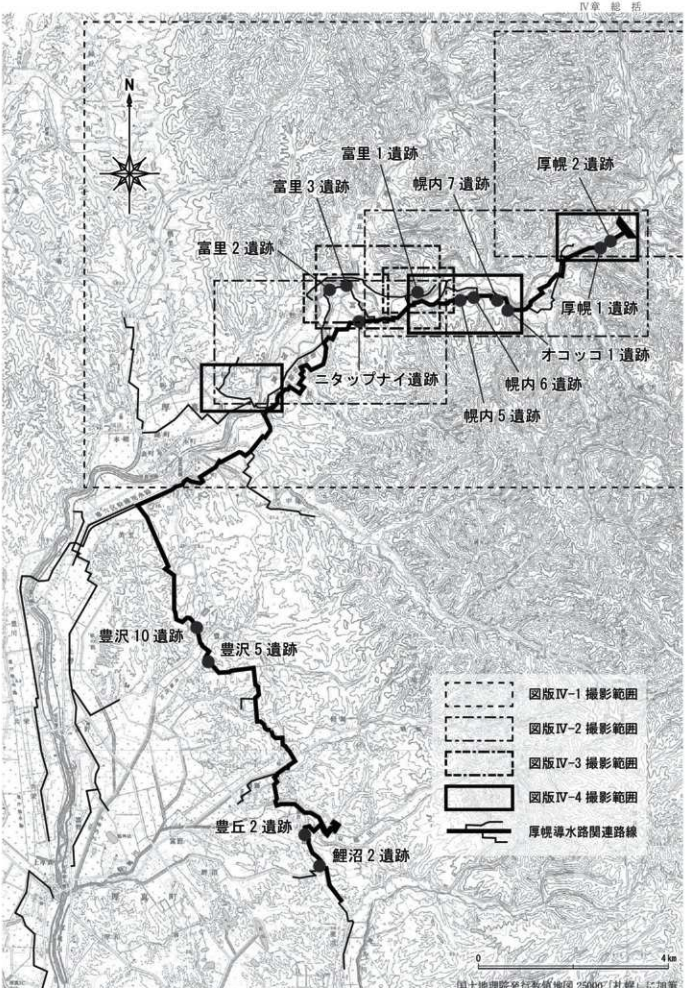


国土地理院発行数値地図 50000（地図画像）「北海道－Ⅲ」「北海道－Ⅳ」に加工、加筆

図Ⅳ－3　遺跡の位置と斜面崩壊・堆積分布図

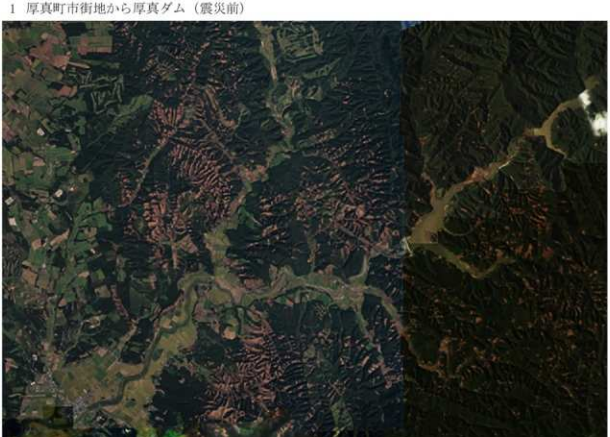


図Ⅳ－４　地質図と斜面崩壊・堆積分布図



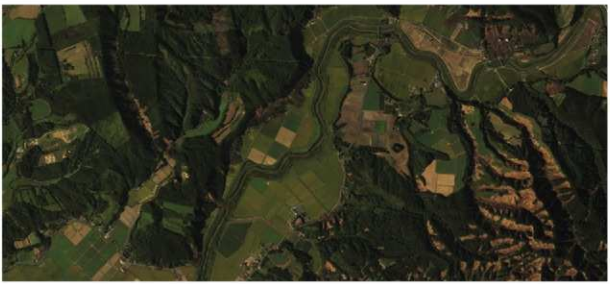
図Ⅳ－５　厚幌導水路関連遺跡と撮影範囲

1　厚真町市街地から厚真ダム（震災前）



2　厚真町市街地から厚真ダム（震災後）

図版Ⅳ－１



1　朝日・吉野・富里地区

2　富里・幌内地区

3　厚幌ダム・厚真ダム周辺

図版Ⅳ－2

1　富里地区

2　富里1遺跡周辺（地震前後）

3　富里2・富里3・ニタップナイ遺跡周辺

図版Ⅳ－3

1　幌内5・幌内6・幌内7・オコッコ1遺跡周辺

2　厚幌1・厚幌2遺跡周辺（地震前後）

3　朝日遺跡（道道上幌内早来停車場線　地震前後）

図版Ⅳ－4

引用・参考文献

〈報告書〉

厚真町教育委員会

2001　『鯉沼2遺跡』鯉沼農地造成工事・土砂採取工事用地内埋蔵文化財工事立会報告書

2004　『厚幌1遺跡』厚幌ダム建設に係る一般道道切替工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

2009　『ニタップナイ遺跡（1）』

国営土地改良事業勇払東部（二期）地区　厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

2010a　『厚幌1遺跡（2）・幌内7遺跡（1）』

国営土地改良事業勇払東部（二期）地区　厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

2010b　『幌内5遺跡（1）・富里2遺跡・ニタップナイ遺跡（2）』

国営土地改良事業勇払東部（二期）地区　厚幌導水路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

2014　『厚幌1遺跡（3）』厚幌ダム建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書7

公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

2013　調査年報25

2014　調査年報26

2015a　調査年報27

2015b　『厚真町　朝日遺跡』 北埋調報313

2016a　調査年報28

2016b　『厚真町　富里3遺跡』 北埋調報326

2017a　調査年報29

2017b　『厚真町　オコッコ1遺跡（1）』 北埋調報338

2017c　『厚真町　厚幌1遺跡　幌内6遺跡　幌内7遺跡』 北埋調報336

2018a　調査年報30

2018b　『厚真町　豊沢5遺跡　富里1遺跡　豊沢10遺跡　豊丘2遺跡』 北埋調報341

〈論文・その他書籍等〉

厚真村　1956　『厚真村史』

厚真村郷土研究会・厚真村教育委員会　1956　『厚真村古代史』

松野久也・石田正夫　1960　『5万分の1地質図幅「早来」および同説明書』北海道開発庁

松野久也・秦光男　1960　『5万分の1地質図幅「追分」および同説明書』北海道開発庁

山口昇一　1960　『5万分の1地質図幅「鵡川」および同説明書』地質調査所

池田実・亀井喜久太郎　1976　『厚真の旧地名を尋ねて』

池田実・亀井喜久太郎　1978　『続厚真の旧地名を尋ねて』

高倉新一郎・秋葉実　1985　『戌牛東西蝦夷山川地理取調日誌　松浦武四郎』中　北海道出版企画センター

高橋功二・和田信彦　1987　『5万分の1地質図幅「穂別」および同説明書』北海道立地下資源調査所

町田洋・新井房夫　1992　『火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』東京大学出版会

高橋功二・谷口久能・渡辺順・石丸聡　2002『5万分の1地質図幅「紅葉山」および同説明書』北海道立地下資源調査所

気象庁地震調査研究推進本部地震調査委員会　2018『平成30年北海道胆振東部地震の評価』

写　真　図　版

図版1　表土除去作業
図版2　土層
図版3　遺構確認調査区調査状況
図版4　東側調査区調査状況（1）
図版5　東側調査区調査状況（2）
図版6　TP－1（西側調査区）
図版7　TP－2（西側調査区）
図版8　西側調査区調査状況
図版9　包含層出土の遺物

1 調査前現況（西から）

2 東側調査区（南から）

3 西側調査区（南西から）

4 遺構確認調査区（南から）

5 調査区全景（東から）

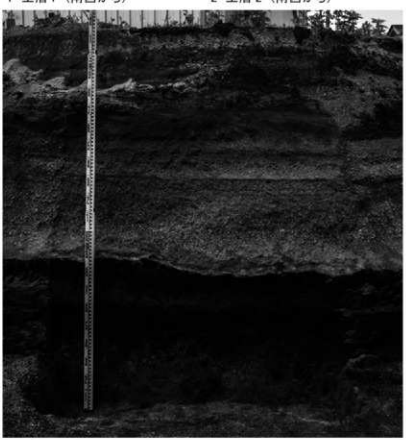
表土除去作業

図版 2

1 土層1（南西から）

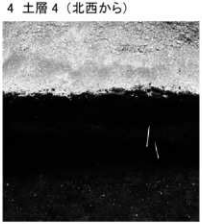
2 土層 2（南西から）

3 土層 3（北西から）



5 土層 5（北西から）

4 土層 4（北西から）



6 土層 6（北西から）

7 土層 7（北から）

8 土層 9（北西から）

1　調査状況（南西から）

2　完掘（西から）

遺構確認調査区調査状況

図版 4

1 調査状況（西から）

2 調査状況（北西から）

3 調査状況（北東から）

4 石鏃出土状況

5 調査状況（北から）

東側調査区調査状況（1）

1 遺構確認調査

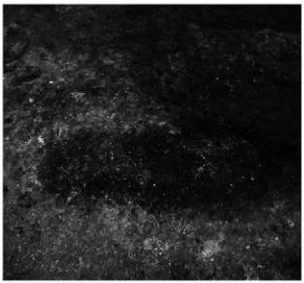
2 完掘（西から）

3 完掘（北西から）

東側調査区調査状況（2）

図版 6

1 検出（北東から）



2 検出（南から）

3 調査状況（北から）

4 断面（南から）

5 完掘（南から）

6 調査状況（南東から）

1 調査状況（北西から）

2 検出（北西から）

3 断面（北西から）

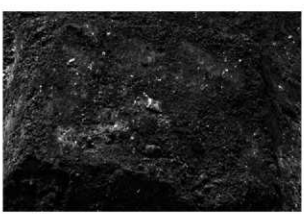
4 調査状況（北東から）

5 完掘（北から）

図版 8

1 調査状況（北東から）

2 調査状況（北西から）

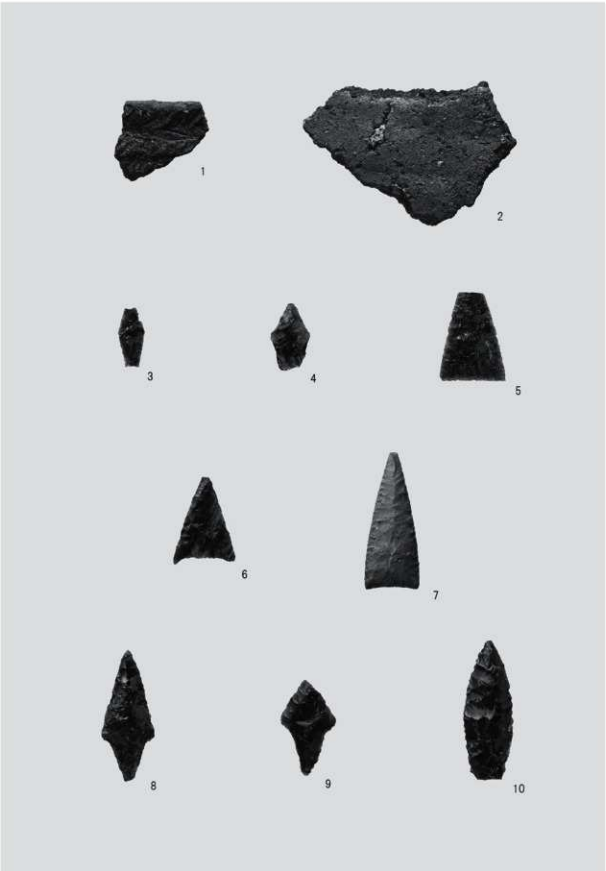


3 石鏃出土状況

4 調査状況（北から）

5 完掘（北東から）

西側調査区調査状況



1 包含層出土の遺物（図Ⅲ－4）

報告書抄録

ふりがな	あつまちょうこいぬま2いせき
書名	厚真町 鯉沼2遺跡
副書名	勇払東部(二期)地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)
シリーズ番号	第358 集
編著者名	村田 大
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター(http://www.domaibun.or.jp)
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL 011-386-3231
発行年月日	平成31(西暦2019)年3月20日

所収遺跡名(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村		J19杭				
鯉沼2遺跡(こいぬま いせき)	北海道(ほっかいどう) 勇払郡(ゆふつぐん) 厚真町(あつまちょう) 字鯉沼(あざこいぬま) 160-1 160-3 161-1	01371	J-13-68	42°38'50"	141°55'04"	20180605 ～ 20180712	1,971㎡	厚幌導水路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鯉沼2遺跡	遺物包含地	縄文時代	Tピット 2基	土器:縄文時代早期後半 石器:石鏃	なし

要約	遺跡は、厚真川支流の軽舞川へ注ぐ小河川、鯉沼川の源頭部付近の台地上に立地する。鯉沼川は厚真川に流入するおもな支流のうち、左岸では最も南に位置している。調査前の現況は畑地であった。遺跡周辺は、畑地の造成工事によって広範囲に平坦化されている。調査区内は東西の低位部分のみに遺物包含層である黒色土が残存していた。 検出した遺構は、Tピット2基である。いずれも西側の調査区から見つかった。平面形が溝状を呈する細長いタイプで、標高30m付近の沢状地形の中にあり、流下線方向と遺構の長軸は平行する。時期は不明。 出土した遺物は、土器が縄文時代早期後半の土器片が1点と無文の土器片が1点。石器は石鏃が8点と剥片が2点である。

遺跡番号は北海道埋蔵文化財包蔵地周知資料登載番号、緯度経度世界測地系による。

（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第358集

厚真町
鯉沼2遺跡

－勇払東部（二期）地区厚幌導水路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行年月日　平成 31 年 3 月 20 日

編集・発行　公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター

〒069－0832　江別市西野幌685番地－1

TEL　(011)386－3231(代表)　FAX　(011)386－3238

URL　http://www.domaibun.or.jp

印　　刷　札幌大同印刷株式会社

〒004－0003　札幌市厚別区厚別東3条2丁目

TEL　(011)897－9711　FAX　(011)897－9715